

第十回新城薪能

とき 平成十一年八月二十一日(土)
午後六時始
ところ 新城文化会館大ホール
入場無料

能組

連吟 杜 若^{ワシテ}太田研司
牧野修貢
中嶋康夫
竹内三省吾
竹内三郎
鈴木英利
清田利高
森田英三
今泉英三
鈴木弘

火入式

新城市議会議長 藤原眞治
新城市教育長 小林芳春

仕舞 西王母 西宮殿 西宮殿
月宮殿 月宮殿 月宮殿
安宅殿 安宅殿 安宅殿
国栖殿 国栖殿 国栖殿

今泉友美
下山敬子
中嶋薫
村木岳史
中川齊

舞囃子 鞍馬天狗 清水俊典

大鼓 清水利高
小鼓 永田聡子
大鼓 鈴木崇史
小鼓 中川齊

地謡 栗谷明生
栗谷浩之

連吟 杜 若^{シテ}荒川享子
加藤弘依
下嶋末子
野沢さよ子
平本太刀子
小林寿枝
高和ゆく子
鈴木富代
金田夏代子
加藤佳子
鈴木芳子
加藤佳子
杉山斐子
星野弘子
竹下京子
永田聡子
水谷麻朱子
過田育代子

ごあいさつ 新城市長 山本芳央

狂言 佐渡狐

佐渡の百姓 大原正巳
越後の百姓 安形忠久
後見 佐野元之助
奏者 酒井 宏

6時50分頃

独調 敦盛
独調 杜若
中村邦生
今岡アイ子
後藤佳代子

仕舞
東玉 北葛丸 鼓衣
北葛丸 鼓衣
迂田育代
加藤佳子
星野弘子
竹下京子
水谷麻朱子

連調 鉢木
中谷村明生
栗谷明生
星野弘子
永田聡子
鈴木芳子
水谷麻朱子
高和ゆき子
小林寿枝
平本太刀子

8時頃
狂言 六地藏
権田重絃
天野雅夫
佐野元之助
中山伸一
スツバ 加藤賢一
スツバ 水谷至男
スツバ 小澤貞博

8時30分頃
能 船弁慶
子方 村木岳史
今泉英三
中嶋康夫
清水俊典
清水利高
森田收
太鼓 鈴木崇史
大鼓 清水利高
小鼓 森田收
太鼓 酒井淑規
問 畑中良雄

後見 粟谷明生
鈴木肇

地謡 加藤貢
太田研司
竹内省吾
田中洋二
栗谷能夫
栗谷浩之
竹内三郎

附祝言

(終了予定九時三十分頃)

主催 新城市文化協会
後援 新城市
新城市教育委員会
新城市観光協会

あ ら す じ

狂言 佐 渡 狐 (さどぎつね)

年貢を納めに、越後の国の百姓と佐渡の国の百姓が同道します。

お互いに国の自慢話をして、内には越後の国の百姓が佐渡に狐がないと言い、佐渡の百姓は狐がいると言って争いになり、刀を賭けることになりました。

実は佐渡には狐がいないので狐を全く知りません。領主の館の奏者に判定をまかせることになりましたが、佐渡の百姓は奏者に袖の下を渡して狐とはどの様なものか特徴を教えて貰いますが、鳴き声について聞かなかつたばかりに……。

狂言 六 地 蔵 (ろくじぞう)

今生後生のため六地藏堂を作りました。そこで安置する地藏を仏師に頼もうと田舎者は、都へ上ります。都に着いたが、仏師の居所を知りません。そこで大声をあげて仏師を尋ねます。これを聞いた都のスッパ(詐欺師)が親切に声をかけ、事情を聞き、自分こそが真仏師であると名乗り、明日の今時分迄に六地藏を作ってやろうと約束します。仲間三人とかたらい、三人づつ二度に分けて地藏に化けて田舎者をだますことにします。そこで……。

能 船 弁 慶 (ふなべんけい)

源義経は、平家追討に武功を立てますが、戦いが終わるとかえって兄頼朝から疑いをかけられ、追われる身となります。義経は弁慶や従者と共に都を出、摂津国(兵庫県)大物浦(尼ヶ崎)から西国へ落ちようとします。静御前も義経を慕ってついて来ますが、弁慶は時節柄同行は似合わしくないから、都へ戻すように義経に進言し了承を得ます。弁慶は静を訪ね、義経の意向を伝言しますが、静は弁慶の計らいであろうと思ひ、義経に会って直接返事をするといいいます。義経の前に来た静は帰京をいいわたされ従わざるをえず、泣き伏します。名残りの酒宴がひらかれ静は義経の不運を嘆きつつ別れの舞をまいます。やがて出発の時となり涙ながら一行を見送ります。(中入)

弁慶は出発をためらう義経を励まして船頭に出船を命じます。船が海上に出ると、にわかには風が変わり激しい波が押し寄せて来ます。船頭は必死に船をあやつりますが、吹き荒れた海上に西国で滅亡した平家一門の亡霊が現われ、中でも平知盛の怨霊は自分が沈んだように義経を海に沈めようと長刀を持って襲いかかつて来ます。義経は少しも動ぜず戦いますが、弁慶は押し隔てて数珠をもんで祈祷します。祈られた亡霊は、しだいに遠ざかりついに見えなくなりす。

薪能（たきぎのう）

この名称は夜になって薪をたいて、それを照明がわりに演能するところから来た名称ではありません。もとは「薪の神事」などと称して新年に御薪を寺社に献進する儀式で、一種の春迎えの信仰行事でありました。それに伴って行われる猿楽が「薪の猿楽」でありました。奈良の「薪能」は奈良時代に起こった行事で、興福寺の修二会に鎮守の社から東西金堂へ行法のために薪を積む儀式であり、その時翁式の聖者が薪を負うてまうことが芸能化しました。初めは寺に所属する呪師が司っていました。後、猿楽者が代行するようになりました。能楽が大成後は金春座が責任者となり、他の座も参勤していましたが、明治以降は中絶、戦後昭和二十一年復活、昭和二十五年京都薪能が平安神宮で催されて以来、各地で大衆野外能として流行するようになりました。

新城に於ては新城文化会館が完成したのを契機に、平成二年第一回新城薪能が新城市文化協会主催で催され大好評を得ました。富永神社の祭礼能とは別に、流派を問わず誰でも参加出来ることとなり、正に「能の里」を目指して参りたいと存じます。現在全国で二〇〇カ所程薪能が催されていますが、全部職分の先生方の演能であります。新城薪能は素人による演能であることが特徴であって、今後永い伝統を持つ祭礼能と共に、薪能を新しい伝統として守り発展させて参りたいと存じて居ります。今後とも皆様方のご支援をお願い致します。

薪能の短歌・俳句を募集しております。あなたの作品を文化協会事務局へお寄せ下さい。

謡・仕舞・囃子（笛、小鼓、大鼓、太鼓）・狂言のお稽古をなさりたい方はお気軽に文化協会事務局へお申し込み下さい。それぞれの向きにお世話を致します。